

## 1. 実施概要

(1) 日時：平成24年10月11日（木） 17:00～19:30

(2) 場所：アウガ5階 AV多機能ホール

(3) テーマ：「地域資源を活用した中心市街地活性化」

### (4) 進行

17:00 開会

17:00～17:05 開会の挨拶

・青森市長 鹿内 博

17:05～17:15 開催趣旨等説明

・内閣府地域活性化推進室次長 横山 典弘

17:15～17:40 基調講演

・青森公立大学経営経済学部教授 佐々木 俊介

17:40～18:10 自治体からの取組事例紹介

・弘前市長 葛西 憲之

・函館市副市長 片岡 格

・青森市長 鹿内 博

休憩（10分）

18:20～19:30 パネルディスカッション

・コーディネーター：佐々木 俊介

・パネリスト：上記市長3名、青森市中心市街地活性化協議会タウンマネージャー加藤 博、有限会社クレイドル代表取締役・一級建築士 高樋 忍

19:30 閉会

## 2. 開会の挨拶

- 青森市は中心市街地活性化計画に取り組んで二期目、6年目に入る。私どもにとっては、中心市街地の活性化、また“まちなか”というのは極めて重要であり、また歴史的背景を持つものである。今日は非常に密度の濃い、バラエティに富んだシンポジウムになる。
- それぞれの地域の特性を活かしつつ、また将来を見据えてまちづくりを進めていくという面でも参考にしていただければ。函館市らしさ、弘前市らしさ、青森市らしさと、それぞれが同じ中心市街地でも、こんなに違うものかということが分かっていただけのものと思う。そしてそれぞれの地域がこのシンポジウムをきっかけにさらに前進していくことを期待申し上げる。



### 3. 開催趣旨等説明

- 中心市街地活性化は、平成18年に大きく変わり、6年が経過したところ。国の認定制度が改正法で導入され、これまで107の市、計118の計画が認定されている。また青森市を含む8市が第二期に入っている。
- 内閣府では、中心市街地活性化の他にも構造改革特区や地域再生法などもあり、様々な施策と連携しながら活性化を進めていこうとしている。
- 経済産業省では、活性化のための補助金として10億円の予算要求をしているところだ。また国土交通省でも、ハード事業を中心に幅広く用意されており、「まちなか居住の推進」は新しく位置づけられた施策、また「身の丈再開発の推進」は身の丈に合った開発の補助率を高めようとするものだ。総務省の施策は、ソフト事業、ハード事業に対して必要な予算の一部を交付措置によって補助しようとするものだ。
- この取り組みに向けた論点として、ご覧のようにいくつか列挙させていただいたので、ぜひシンポジウムの参考にしていただければと思う。



### 4. 基調講演の概要

- まずは潜在的な強みを活かすこと。中心市街地はかつて顔であり、いろいろな強みを持っていたがそれが失われてきた。それを取り戻そうということ。もうひとつは、新しい考え方に立てば、まだまだ可能性はあるということだ。
- 仮に中心市街地がなくなったことを考えると、どこにでもあるみな同じまちになってしまうということ。歴史や伝統、また記録というものがなくなり寂しいまちになってしまう。整備されてきた様々な公共施設が使われなくなり、これまでの努力や投資が無駄になってしまうことになる。
- 中心市街地にある空き家、空き地、空き店舗や倉庫などは、新しい事業、活動を起こすための資産だ。まだ公共交通の結節点であることからそれを活かさない手はないのではないのか。都市計画の先進地といわれるイギリスでは、中心地に住居や公共サービスを集積させたフック・ニュータウンがつけられた。やはりこの都市性が重要だと思う。
- 例えば青森では郊外に住むと高齢の方は除雪も大変だということで、中心地に住む方も増えてきている。防災面を考えても同じことが言えると思う。またそんな中、中心地の公共交通を整備することも重要になる。
- 中心商店街については、郊外では買えない商品、サービスなどをどう揃えるかが非常に重要なところである。商店街活性化のポイントとして挙げられるのは、「郊外の市街地との差別化」、「コミュニケーションを通じた人によるサービス」、「観光という視点での周辺地域との結びつき」、そして「都市性の向上」の4つが大きなポイントとなるのではない



か。

## 5. 事例紹介

### (1) 弘前市

- 中心市街地に目を向けさせるために何が必要かといえば、やはり「人」。商店街の活性化という議論ではなく、むしろパフォーマンスの場、舞台装置の場としての中心市街地を目指さなければと思う。市民、若者のダイナミズムを生むこと、観光客との交流、そこから商店街の変化も生まれるのでは。取り組みとして、公共交通を活用した歩行者天国のような「ライド・トゥ・パーク」は、イベント等をしっかり作り込んで行った。「楽市・楽座」では、中心市街地への出店を応援。また産直マルシェ事業として行っている「弘前マルシェ・フォーレ」は予想以上の大盛況となり、周辺のマンション等から続々と人が集まり、観光客も訪れる。これは以前イベント等には使えなかった歩行者道路を市が許可して使えるようにしたものだ。
- 核になる施設が必要ということで「土手町コミュニティパーク」を作った。経産省の補助金制度を活用したものだ。また「子育て・健康・交流」をテーマとしたフロアを持つ再開発ビルは、少子高齢化をうまく解決していく実証ビルとして位置付けている。人が集まることでさらに人が集まり、良い循環を生む。そういう考えでまちづくりを進めているところだ。

### (2) 函館市

- これまでの取り組みとして、平成11年に基本計画を策定し、駅前的大门地区約48haを対象として整備を行ってきた。16年度に駅前区画整備事業で駅前広場の整備を実施し、大型パブリックアートも設け、駅舎とともにまちの顔となっている。さらにプロポーザルコンペを実施し、大規模な花の植栽も行った。借上げ市営住宅も整備した。
- 「はこだてグリーンプラザ」を整備し、オープンカフェや合同学生祭、あるいはフリーマーケットなど様々なイベントがここで開催されている。平成12年度には第三セクターの(株)函館ティエムオーを設立、屋台村の「大門横丁」を開業させ、客数は年間14万人余りにのぼり、観光客が気軽に地元とふれあえる人気のスポットとなっている。
- 「市民生活と歴史・文化、観光が融合した回遊性の高いまち」というコンセプトで計画を策定中だ。その中では、ワンストップサービスを実現できる観光センターも駅前に整備したいと考えている。平成27年度には北海道新幹線新函館(仮称)の開業が予定されており、なるべく早急に新たなまちづくりを实



施していきたい。

### (3) 青森市

- 青森市は第一期が終了し、第二期の認定を受けたところ。まちの宝を大事にしていく、それがまちの活性化につながると思う。その宝のひとつとしてあるのが、「ねぶたの家ワ・ラッセ」。入館者は40万人を突破し、ねぶたを中心としたまちづくりが進められている。また港も宝であり、さらにまちづくりのキーワードとしての新幹線、青函連絡船もよい効果を生んでいる。文化・芸術では、太宰治の「赤い絆モミュメント」などがある。さらに駅前の市場を中心に食めぐりにも力を入れており、「グルメロード」整備の計画もある。
- 市民ボランティアによる「街てくガイド」や「まちなかしかへらあ〜ず（教える）」といった活動もある。また「まちなか居住」も進めており、マンションの整備や冬期に除雪等を行うバリアフリー整備、「まちなかおんせん」などの整備も行っている。
- 駅があるからこそ、新幹線があり、港があり、中心市街地がある。また公共交通があつていろいろなものをつないでいる。中心市街地と周辺的生活空間をどのようにつないでいくかが重要。弘前市や函館市との広域連携も駅があるからこそと言える。青森市の「宝」をつないだ回遊性の向上をよりいっそう進めていきたい。



## 6. パネルディスカッションの概要

《地域資源を活用した中心市街地活性化について》

※まず、高樋代表取締役から青森市内で行ったイベント事業についての概要紹介があった。

- (加藤タウンマネージャー) ご紹介いただいたイベントは本当に経費がかからないで、にぎわいを作ることができたものだ。高校生が中心となってくれ、この後を継いでいかないと中心市街地もなくなってしまうだろう。地域資源といえば青森市はねぶた、リンゴ、ホタテ、海と言われる。イベントは、市の職員が率先して参加してきたが、それは商店街の方々が頑張つて汗をかいてきたからで、それが大学生や高校生を巻き込んでいってくれる。
- (函館市副市長) 函館市は、国際港としての長い歴史の中で異国情緒あふれる資源を培ってきた。そういった観光資源をどれだけ中心市街地と連携させるかが宿題。また三方を海に囲まれて豊富な海産物があり、その食材を活かした展開が図れないかというのが課題。
- (弘前市長) 様々な多くの資源が混在一体となっているのが弘前のまち。それこそを特徴ととらえ、大事にし、地域資源の活用を考えていきたい。
- (青森市長) 「青函ワールド」が多くの人を引きつけた。それは青函、海、港というロマンチックさや懐かしさに惹かれたということ。青函や連絡船というキーワードが、観光だけで



はなく、教育、まちづくり、人の交流などいろいろなものに広がっていく。やはり海の歴史、船の歴史があるからこそだと思う。

《中心市街地活性化と観光について》

- （加藤タウンマネージャー）経済効果が生まれないものは、観光にも中心市街地にも寄与しないと考える。やはり地域の外から集客をしていかなければ地域の内では少子高齢化も進む一方だし、売上も減少していく。
- （高樋代表取締役）青森市はポテンシャルはあるが、たまたかかもしれないが連携がうまくいっていない印象を受けた。また、朝、昼、夜と時間によっての魅力があるのではないかと。そういう魅力をリアルに感じられれば良いと思う。
- （弘前市長）ラビリンスと言ったが、都市の魅力はその先に何があるかよく見えない状況があった方がわくわく感がある。
- （函館市副市長）函館市の観光は、必ず一泊していただける。それは夜景があるから。ただそれを二泊三泊と滞在型の観光にしていきたい。観光客数を増やすのは難しいが、滞在しただけ時間を使ってもらうかが課題だ。
- （青森市長）空港、新幹線、高速道路、といった交通の拠点を活かす。食についても太平洋のもの、日本海のもの、むつ湾のものもあり、酒もあるし、肉もある。四季それぞれにあるのに十分活かしきっていないのが現状。芸術・アート分野でも可能性を広げたい。
- （コーディネーター）地域の資源にもっと磨きをかけていくことが大事だろう。もうひとつは地域が連携しあうことで広域圏全体が多様性と厚みのある観光になっていく。そういう中で中心市街地が元気になっていくのではないかと。



## 7. 閉会